

よろづよにまに／＼みえむあしたづもふりにしことはわすれやはする、とて奉り給へば、みやいり給ぬ、左のおとゞかくおいがくもんみなせらるゝなかに、なかにか衛門督のいとまめやかにとて、おさめられけむ、略下

〔清水物語<sup>上</sup>〕四條四條の辻に、こま物みせとて、たなひとつに、色々さまざまの物を取あつめておき、人の用次第にうるもの、候此者に一色にてもあつらへて見候へば、いづれにてもわがまよくにはあらず候、上手のしおきたるを讀賣にいたし候間、御用ならば、其人にあつらへてまいらせんといふ、學文にもうけ賣の人こそおほく候へ、

〔九州のみちの記〕太宰帥隆家筑紫に下りける時、扇たまはせ給ふとて、枇杷大后宮、涼しさはいきの松原とよみし所にぞあなるが、誠に歌人は行ずして、名所をしると、諺にいへるが如く、松原の景氣海に近く、ちとさしあがり、高き所なれば、すゞしかるべき境地なり、

〔嬉遊笑覽<sup>三</sup>詩歌〕諺に連歌師が露字を質に置といふは、何よりいひ出たることか、世の人心五昔日立花の家より、鳶尾シヤカの前置を金子百兩の質に入れ、連歌の花の下より、露といふ字を黄金二拾枚に置れける、質にあるうちは、花さしに鳶尾をつかはせず、連歌師に露といふことをいだけさせぬは、此約束を迷惑して請られけるといへり、おもふに作者の滑稽なるべし、さりながら立花連歌はやりたれば、かゝる説も有なり、温故集にむかし露といふ字を質に置たまへるとは、連歌師の風流なり、しら露の手形もとりて今朝の秋、蓮谷今これらの趣向に倣ひたる事にや、

〔嬉遊笑覽<sup>三</sup>詩歌〕世の諺に、俳諧師を座しき乞食といやしむことも、と連歌師をいへり、歌林雜話に、紹巴がことをいふ處、古今は近衛殿より御傳あり、稱名院殿は、かれは乞食の客なればとて、御ゆるしなきなり、

〔元祿太平記〕世の中に學問をばしながら、悪きふるまひの人を見て、凡夫の口より、論語よみの論